

ヒロシマ ユネスコ

原爆ドーム・遺産登録 記念行事報告特集

世界遺産として登録されました。それを実現したのは広島市

ドーム遺産化の経緯



講演要旨

『原爆ドーム発・世界へのメッセージ』

広島市長 平岡 敬氏

講演と朗読劇のタベから〜

広島ユネスコ協会では、昨年九月二十五日、原爆ドームがユネスコの世界遺産に登録されたことを記念して、講演と朗読劇のタベ「アウシュヴィッツからヒロシマへ」を、西区民文化センターで開催いたしました。この催しは、第一部で、平岡敬広島市長による講演「原爆ドーム発・世界へのメッセージ」を、第二部で、劇団俳優座の加藤剛氏の朗読劇「コルチャック先生とその死と愛」を内容としたものですが、それぞれの講師が、大変格調高く、平和への熱い思いを述べられ、聴衆の皆さんも深く感銘された様子でした。

当日の参加者は、約五百名でしたが、事前に会員外の参加者を募集したところ、千五百名余の応募が寄せられ、関心の高さを示していました。抽選の整理に追われるな

民をはじめ、平和を願う多くの日本人の熱意でした。原爆ドームを世界遺産に登録して世界に平和を訴えようという声は日本が一九九二年（平成四年）六月に、世界遺産条約に批准をしてから急速に高まってまいりました。そこで広島市は、平成四年の七月から外務省、文化庁に対して登録への要請を行ってまいりました。そしてその年の九月には広島市議会が、原爆ドームを世界遺産リストに登録することを求める意見書を採択しま

して、総理大臣をはじめ関係大臣に提出をしたものでございます。わたくしも、総理大臣をはじめ文化庁長官、外務大臣に、さまざま要望をいたしました。平成五年六月には、「原爆ドームの世界遺産化をすすめる会」が発足いたしました。これは、大変幅の広い団体でありまして、県の被団協をはじめ県医師会、歯科医師会、そしてユネスコ協会、さらには弁護士会、連合広島、また市内の各ライオン

ズクラブ、こういった各界の方々が中心になってこの「すすめる会」をたちあげ、そして全国的な署名運動が展開されたわけでありまして。最終的には百六十五万人の署名が集まりました。正直言って、はじめは、文化庁の反応はあまり芳しいものではございませんでした。世界遺産に登録するためには、国内法による法措置というものが必要であります。ところが原爆ドームは、史跡に指定されてお

りません。従来の文化財の概念にあてはまらないということ、文化財保護法の適用を受けていなかったのです。それゆえ登録申請もできなかったのです。文化庁を動かしたのは百六十五万人の署名に示された、日本人の熱意でありました。当時の羽田首相は、「原爆ドームは長く世界に平和をアピールするためにも必要だし、それを登録することは大変なことだ」といって、推薦の検討をすぐ指示されました。非常にはやく反応されました。そうしたことから、遺産化を進める運動もますます高まり、これをうけまして、参議院が遺産化を求める請願を採択する、続いて衆議院も採択する。そういうことで、原爆ドーム

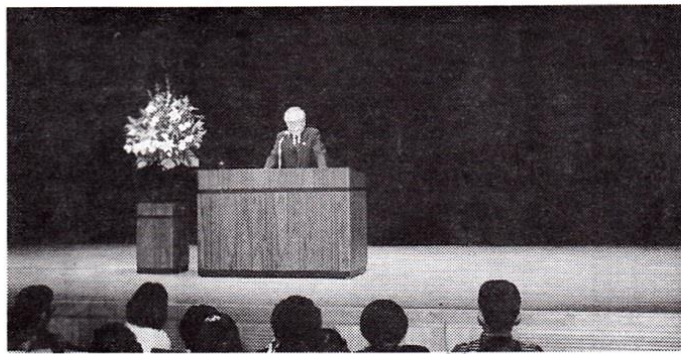
遺産化の意義

ムが文化財に指定され、遺産登録の資格を得たうえで世界遺産に推薦され、昨年の十二月に遺産登録が実現されたのであります。あらためまして、市民の皆様が感謝を申し上げる次第であります。

遺産登録が実現したとき、新聞、テレビの記者から、感想を求められました。長い間の運動の成果でありますので、その実現は喜ぶべきこともわかりませんが、わたくしはとても嬉しいとか、うれしいといった感想は言いませんでした。それは当然、原爆ドームを見るときに、わたしたちは原爆で亡くなった多くの犠牲者のことを、思い出さずにはおれないからであります。わたくしは、大変意義深い、と申し上げました。原爆ドームの世界遺産化がなぜ意義深いのか、それは今日どういう意味を持っているのか、そういうことを皆様と一緒に考えていきたいと思えます。

人類の歴史には、あるいは国家の歴史には、光と影の部分があります。光り輝く栄光の歴史と、そして暗い恥ずかしい恥辱の歴史がない交ぜになっている

わけです。それは、正と負、あるいはプラスとマイナス、こういったものが歴史であると思えます。わたしたちは、光り輝く部分だけ見たいし、またマイナスの歴史からは目をそらせたいと思えます。それが正直な人間の間持ちだろうと思えます。しかしながら、その影の部分を見ることが、光の部分の価値を一層良く理解できるのであります。人間は地球上に出現して以来、火を発見し、そして道具を使ってすばらしい文化をこの地球上に創りだしてまいりました。非常に優れた建築物、あるいは美術、音楽、文学、こうい



ったものにわたしたちが触れるときに、わたしたちは人間のすばらしさに感銘をうけ、そしてわたしたちの精神は高められるのであります。その一方で、人間は有史以来、愚かな行為を繰り返してまいりました。その最たるものは、人殺しであり、そして戦争です。

九六年までに登録されました世界遺産、文化遺産は三百八十、自然遺産は百七、そして文化遺産と自然遺産が重ね合わさった両方の要素をもっている複合遺産が十九あります。全部で五百六の遺産が、登録されているのであります。その中に、大変すばらしい文化遺産があります。そのほとんどがすばらしいものです。そして、わたしたちはそういう文化を創りだしてきた「人間」、それは本当にすばらしい存在だと思えますが、そういう五百六の遺産の中に、実は人間の負の遺産とも言えるべきものがあります。

例えば、西アフリカのセネガル共和国にはゴレ島という島があります。ここは実は、奴隷貿易の根拠地であったわけです。奴隷貿易というのは、人間を売買するものであります。人間が他の人間の労働力を所有して、そして支配する制度、これが奴

隷制であります。それは人間が人格を否定され、物としてみなされる、そういう制度は実はギリシャ、ローマ時代からあったわけですが、近代においてもなお、南北アメリカあるいはその植民地などで存在いたしました。これは本当に人類の恥ずべき制度であります。そしてまた、もう一つ、わたしたちの人類の負の遺産というものがあります。それは、ポーランドの Auschwitz ヲツツの収容所であり

ます。これもまた、人類の負の遺産であります。これはナチス・ドイツによるユダヤ人の大量虐殺の忌まわしい記憶を忘れない為に、人類は再びこのような悪行を繰り返さないために、強制収容所から、あるいはそこで行われた惨劇から目を背けてはならない、そういう遺産であります。

そして原爆ドームもまた大量無差別殺戮の記憶をとどめる遺跡であります。これらの忌まわしい出来事は、本当は人類の記憶から消してしまいたい、忘れてしまいたいと思うものですが、そうではなくて、そうした負の遺産を登録し、そして保存し、記憶していこうとすること、これはまさしく人類の進歩だと思えます。つまりそれは、奴隷



制は間違っているものだと否定し、なくしていった。そしてそれと同じように、Auschwitz ヲツツという負の遺産を登録して保存し、また記憶していこうということは、まさしくその人類の進歩を示しているのだと思っております。そして原爆ドームは、核兵器廃絶と平和を願うシンボルであります。それはもちろんいうまでもなく、人間が核兵器を開発し、そして使用したことによって出現した戦争遺跡であります。





無差別大量殺戮の時代へ

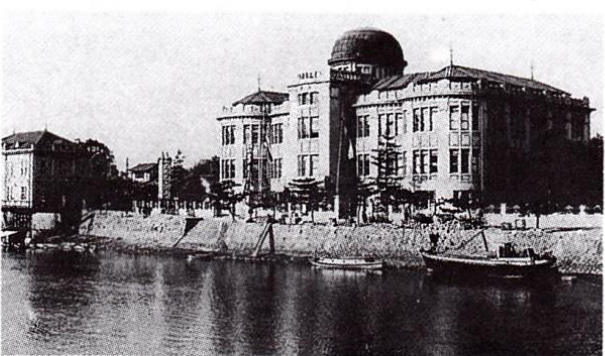
そこで、一体なぜ人間が核兵器をつくったか、これを考えるためにはもう一度、二十世紀の歴史を考えてみる必要がある。二十世紀は、戦争と革命の世紀でありました。人類の歴史でかつてない程、多くの人が殺された世紀でありました。わたしたち人類は、古くから多くの戦いを経験してきましたけれども、今世紀ほど多くの犠牲者が出た時代はありませんでした。二十世紀の前半には、二度の世界大戦がありました。二十世紀後半の東西冷戦の時代でも第三世界を巻き込んで、朝鮮戦争、中東戦争、ベトナム戦争、湾岸

戦争など、多くの熱い戦争が行われました。多くの人が犠牲になりました。そして今も地球上では民族、宗教などの対立から戦いが行われております。その背景には、偏狭なナシヨナリズム、誤った大義名分、あるいは宗教的狂信といった観念が存在します。そして国民、民族を殺しあいへとかりたてて、夥しい数の人々が犠牲となりました。十九世紀までは、戦争というものは戦闘の専門家、あるいは専門家集団、つまり軍人と軍隊によって戦われてきました。ところが二十世紀に入って、戦争は、国家総力戦という形をとるようになり、国民全員が戦争にかりたてられ、巻き込まれるようになりました。その上、第一

次世界大戦、第二次世界大戦では科学技術の発達に伴って、兵器の殺傷力が極度に高まりました。そのため戦闘員はもちろんのことですが、民間の非戦闘員も含めて戦争の犠牲者は、膨大な数にのぼったのであります。第一次大戦でも、戦死者百五十万人、負傷者二千万人、行方不明者と捕虜は八百万人にのぼったといわれております。第二次大戦では、アジアでもヨーロッパでも発達した航空機によって、都市空襲が盛んに行われました。それは、無差別爆撃という形をとったため、多くの民間人が家を焼かれ、犠牲者の数は第一次大戦の何倍にもなりました。世界年鑑一九四九年版によりますと、戦死者は約二千五百万人、民間人の犠牲者は約二千五百万人、戦傷者約三千五百万人となっており、大変な数の人たちが、第二次世界大戦では犠牲になったわけでありま

す。一九四五年（昭和二〇年）の三月十日未明に東京は、大空襲をうけました。これは先発の爆撃隊が目標地点に到達したら、ずっと周りに焼夷弾を落としていく。そして住民をその中に閉じ込め、後続の爆撃部隊がその内側に焼夷弾を落としていく。そこで、大変大きな火災が起こる。わずか二時間半で、首都の四十%が焦土になりました。そして、十万人が死亡、十一万人が負傷しました。こういう空襲の悲劇は、日本だけではありません。一九四三年（昭和一八年）の夏、ドイツのハンブルグでは空襲をうけて、この時の無差別爆撃によって、五万人の死者がでたと記録されております。また、一九四五年（昭和二〇年）二月のドイツのドレスデンの爆撃で、この町は壊滅をいたしました。

こうした都市無差別爆撃が行われたのは、一九三七年（昭和一二）の四月二十六日に、ヒットラーのドイツ空軍がスペインのバスク地方にある、ゲルニカという町を爆撃したことに始まります。この時も民衆の犠牲はたくさん出たわけでありましたが、その爆撃への怒りというもの、ピカソが有名な「ゲルニカ」という作品に描いております。このゲルニカ爆撃、この原動力となった、あるいはそれを支えた思想、それを実行させた思想は、イタリアのジュリオ・ドゥーエ少将という陸軍少将が説いた戦略理論であり、このドゥーエ少将の理論は、交戦員と非交戦員



もう時代遅れだ、今日戦争をするのは軍隊ではなくて、国民であると、こういう考え方なのです。一九三〇年、三五年ごろから、ずっと色濃くヨーロッパで流布されてきました、それを実行したのがナチス・ドイツ空軍のゲルニカ爆撃、つまり空からの無差別大量殺戮という考え方がこれから始まったのです。そしてそういう考え方は、実はイタリアのエチオピア攻撃であり、そして日本の重慶爆撃であります。そして、地球上に多くの悲劇をうみ、その流れが最終的には東京空襲となり、最後には広島、長崎の原爆投下へと結びついていったわけです。

そうしたたくさんの方々の戦略爆撃、つまり無差別大量殺戮があつてさまざまな悲劇が地球上に出現したわけです。やはり、忘れられないのは第二次大戦末期に、広島と長崎に投下された原子爆弾です。それは、一瞬にして多くの人命を奪いました。そして、多くの人を傷つけ、また生き残った人々を放射線による後遺症で、今も苦しめているのです。これは皆さんご承知のとおりであります。振り返ってみますと、ドイツで行われた六百万人にもほるユダヤ人の大量虐殺、これを象徴しているのが、アウシュヴィッツの強制収容所です。こうしたユダヤ人の大量虐殺、あるいはソ連で行われたポーランド人の虐殺、そして空襲や原爆による大量殺戮など、二十世紀はまさに殺戮、虐殺の時代でありました。第二次大戦が終わつてからも、戦闘員と非戦闘員の区別がなくなつて、大量の殺戮が繰り返されております。今また、対人地雷という問題が話題となつておりますが、こういうものも今、地球上に存在して多くの人を傷つけています。十九世紀までの戦争はまだ、法と秩序と節度の世界にありました。それに対して二十世紀の戦争ではそれらがすべ

て失われ、無視されました。しかしながら、戦争が終わつて半世紀を過ぎた今、更に、恐らくは今後も、半ば永遠に、人々は、広島とアウシュヴィッツを語り続けるのではないのでしょうか。

なぜ人々は広島とアウシュヴィッツを語り続けるのでしょうか。それは、犠牲者が特に多かつたからでしょうか。それとも、殺され方が異常な形だつたからでしょうか。確かにそういうこともあるかもしれませんが、しかし、それだけではありません。犠牲者の数が多いことではない、先程話しましたドレスデン、あるいは東京大空襲が死者の数では広島や長崎を超えているかもしれませんが、しかしなが

核廃絶への動きと問題点

わたしたちが広島、長崎にこだわり続ける理由は、核兵器が極めて非人間的、非人道的な兵器であるからです。戦争が人殺しの場であり、戦いは敵をいかに多く、安く殺すかということが大事だと、こういう立場で考えますと、つまり戦争の効率性という観点からみますと、核兵器ほど安上がりな人を殺すものはありません。しかし人類は、

ら、わたしたちは広島とアウシュヴィッツというこの二つの地名を聞くとき、人間というものを考えざるをえないのです。それは、広島やアウシュヴィッツがわたしたちにとって、人間とは一体何なのか、人間はどこまで理性に背を向けて生きていくのであるのか、こういったことを問い続けているからだと思えます。人間は初めに申しましたように、すばらしい文化を創造する、光り輝く存在ですが、一方で、広島にしろ、アウシュヴィッツにしろ、その出来事の底に共通して流れている皆殺しの思想、これは理性を失った人間の行為の恐ろしさを示しております。

広島と長崎に核兵器を投下した後、今日まで核兵器を使うことにはありませんでした。それはやはり、人々が広島と長崎の惨状を知つて、核兵器を使うことがもしたたら人類の最後につながるのではないかということを感じるのではないのでしょうか。核に限つて言うならば、戦争の効率性だけを重視してはならないということを知つたから



だと思えます。

そういう立場で考えますと、核兵器を使つたから、戦争が早く終わった、あるいは核兵器を使ったという発想が、いかに間違つたものであるかということが分かつて頂けると思えます。東西冷戦が終わつて、大陸間弾道弾が飛び交うかもしれないといつた大規模な核戦争の恐怖は、少し薄らいできました。その東

西冷戦を終わらせた原因の一つは、止めどもない核軍拡競争による経済の破綻でありました。冷戦終結前には、核保有国の核弾頭は約七万発ありました。冷戦が終わつて、核軍縮が幾らか進んでおります。それによつて、アメリカと旧ソ連諸国に存在する核弾頭約三万発が削減されました。七万マイナス三万、つまり四万ぐらいあるはずですが、昨年九月、国連総会において



CTBT、包括的核実験禁止条約が採択されました。この条約は、コンピューターを使ったシミュレーションなど、爆発を伴わない実験は許されると、こういう抜け道はあるわけでありませんが、これまで野放しだった核爆発を国際法で禁じたことの意味は、大変大きいとわたくしは思っております。インドなどまだ署名の意思を見せてない国もあるために、このCTBTの発効の目処はたっておりませんが、大多数の国が署名を済ませている以上、CTBTはすでに実質的な国際規範として確立したといってもよいだろうと思います。

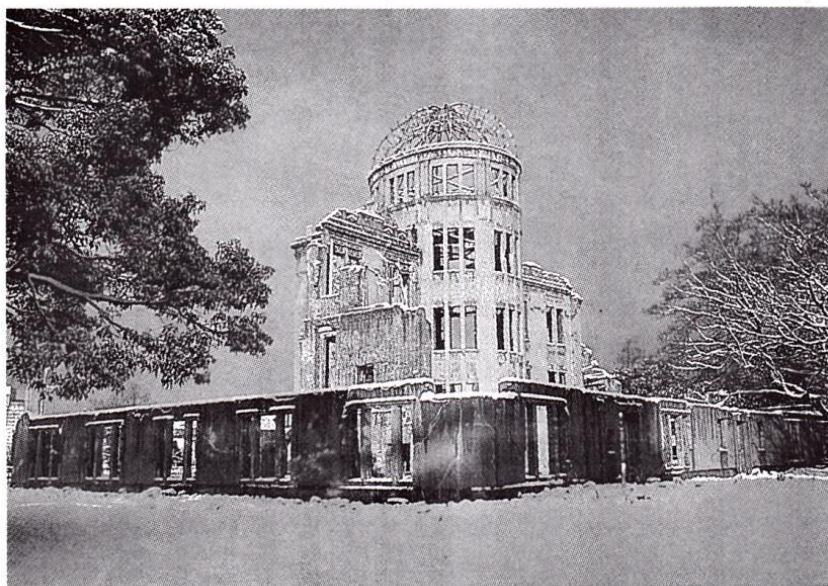
そこで、この次の目標は言うまでもなく、核兵器の使用や威嚇はもちろんです。開発、製造、実験、配備、備蓄、移動とこういったものを全面的に禁止する核兵器禁止条約の締結であります。昨年十二月には、国連総会で核兵器禁止条約の締結交渉を求める決議が採択されました。この決議は昨年七月の、核兵器は一般的には国際法に違反するという国際司法裁判所の勧告が出された際に、裁判官が全員一致して核保有国は誠実に核軍縮に努力する義務があるとすることを求めたことを受けています。更には、現在の南半球、中南米、南太平洋、アフリカ、東南アジア、こういうところに非核地帯条約ができております。こうして核兵器のない世界を作ろうという声、一昔前に比べて非常に強くなってきている、そういう思いがするわけです。

しかしながら、まだまだ油断ができない理由があります。まだ地球上には、たくさんの核爆弾が残っております。一説には四万発といわれます。また二万五千発ともいわれます。しかも、米国がこの七月にニューメキシコ州のネバダの核実験場で臨界前核実験を行いました。そして去る九月十八日には、二回目の実験を行ったのであります。更に、米国は今年、地表貫

通型核爆弾B-61-11という爆弾を配備しようとしています。この爆弾は、地下に潜って爆発をする。したがって、その核による一次被害が少ないといっています。地下にある構造物を攻撃する爆弾、こういうものを配備しました。

つまり、確かに核廃絶、あるいは核をなくそうという声は世界的に強まっております。国際社会でも大きな潮流となりつつありますが、わたしたちの目の届かないところで、また目に見えない形で核兵器の開発は進んでいるということがいえます。臨界前核実験につきまして、米国は核兵器の信頼性、安全性を確保するためだということを言い、爆発を伴わないならCTBTに抵触しないといっております。ですが、これはCTBTの精神を踏みにじるものであります。米国の核軍縮への熱意、核廃絶への誠意というものを疑わせておられます。こうしたことがどんどん続きますと、核軍縮へと向かっている国際社会の流れを妨げることとなります。

そして今、多くの国が核拡散防止条約に加盟して、核がこれ以上広がらないといった体制ができていくわけでありまして。このNPT体制が崩壊するかも分からないうことを、わたくしは心配しております。余談になりますが、大変心配なことがあります。先程の臨界前核実験の一回目の成功の時、おそらく皆さんテレビでご覧になったと思います。科学者たち、あるいは技術者たちであると思いますが、実験成功を見て、一斉に拍手をしておりました。これには、わたくしは背筋がぞつとしたのです。先程、ナチス・ドイツによるユダヤ人の大量虐殺の話を読みました。



このユダヤ人絶滅計画の背景には、ドイツ民族を優秀民族とみて、優秀民族のみが理想国家をつくれるという思想がありました。そこで、ユダヤ人だけではなく、ドイツ民族の身体障害者、あるいは精神障害者までも安楽死という方法で抹殺したのであります。問題はこの安楽死に、医師や科学者が積極的に協力したということです。日本でも、細菌部隊による生体実験を行うときにも、医師や科学者が加担をしております。この科学者の殺人への協力、これは意識的か無意識的か分かりませんが、この殺人への協力というものは、実は原爆を開発したマンハッタン計画における科学者のあり方、これをわたくし



に思い起こさせたのであります。実験成功に拍手するあの人たち、おそらく科学者、技術者でしょうが、こういう人たちを見て科学と人間のあり方、こういうものを考えさせられました。

わたくしは今年の平和宣言で、科学技術の恐ろしさに触れましたけど、どこが恐ろしいかと申しますと、仮にわたしたちの努力が成功して地球上から核兵器がなくなつたとしても、実は核兵器を造る知識というものを人間は身につけてしまったのです。とするならば、今後人間が本心に心から平和な人間にならないかぎり、我々は核の恐怖の下に生きていかなければならないと感じております。

核廃絶への展望と不安

今国際社会は、核兵器をなくそうという勢力と、そして核抑止力に頼ろうという国がせめぎ合っている状態であろうと思います。核廃絶の見通しは、実は明るい展望も感じさせます。しかしながら、先程言いましたような不安もある、いわゆる一進一退を繰り返しながら、今せめぎ合っているのだらうと思います。ドームが世界遺産に登録されたということは、やはり二度と核兵器を使わない、あるいは使ってはならない、こういう考え方は日本人には当たり前の考え方なのですが、そういう考え方が今や国際社会にあつて、共通の認識になつてきたと思ひます。しかし、メキシコのメリダで開かれました世界遺産委員会で、米国や中国は、実は反対をし、態度を保留いたしました。この米国や中国の反応は、わたしたちに大変多くのことを考えさせます。中国の代表はこう言いました。「第二次世界大戦で、アジアで他にも生命や財産を失つて苦しんだ数多くの人がいるのだ。しかしこの事

実を認めようとしていない人々が日本にはいる。今回の広島登録は、例え登録の要件にあてはまるとしても、多くの人々の安全保障を脅かす恐れがあると考えるので、我々は今回の決定から外れる。」こう言つて中国の代表は、態度を保留したのであります。これは、日本が被害だけを言うのではなくて、戦争における加害といった面もきちんと認識してほしいという、中国側の意思の表明でありました。つまり、原爆ドームを免罪符にして過去の戦争で日本がやったことを忘れるなどということだらうと思ひます。それはまさしくその通りであります。

また、米国は、「日本と米国は親しい友人であり、同盟国である。多くの日本人と米国人が強い絆で結ばれている。それにもかかわらず、米国はこの登録について支持することはできない。原爆ドームの申請については歴史認識が欠けているのではないかと、米国は懸念している。第二次世界大戦を終わらせる為に、米国が原爆を使用した。その前段階で一体何があつたのか、それを理解することが広島国の悲劇を理解する鍵となる。米

国は戦争遺跡の登録が、世界遺産条約の範囲以外にあると考える」という声明を発表したのであります。米国の反対の理由、これはいろいろ反論していけば大変長くなるので今日は省きますけれども、わたしが想像するに、やはり米国としてはこういうものが残っていくということについては、何か心の疼きを感じるのではないかという感じがするのであります。と申しますのは、米国は今日に至るまで原爆投下の正当性を一貫して主張しております。わたしたちは、原爆投下は必要なかったと絶えずいつているのでありますが、

いまだずっと一貫して米国政府は原爆投下は正しかった、そしてそれによって、多くの生命が救われたということをいつているのであります。こうした米国と中国の反対というものは、改めてわたしたちに、わたしたちの核廃絶の訴えと、そして日本の戦後処理、あるいは歴史認識との関係を浮き彫りにすることになつたのです。つまり核廃絶というものは、人類全体で取り組まなければいけない問題、そして日本の歴史認識と今の日本国家の問題、そうした次元の異なる二つの事柄が、日本という枠組みの中に取り込まれてしまつたために、その関係が大変分かりにく

くなるわけでありますが、忘れてはならないことは、核兵器が後々まで放射線の影響を残す、非人道的兵器であり、核廃絶は人類全体の問題として取り組まなければならない、こういうことだと思ひます。

これまで広島、長崎はその被爆体験をもとに、各兵器廃絶を訴えてきました。被爆後半世紀を経た今日、過去の歴史を直視しながら、広島、長崎の核兵器廃絶の主張が、更に説得力を持つように努力していくことが、これからの大きな課題であると思ひます。そしてその説得力を持つための条件はいろいろあると思ひます。このことを、本当は皆さんと一緒に考えていかなければならないと思ひます。

本島発言の問題点

原爆ドームの遺産登録が決まつたことに、米国、中国と共に異議を唱えた人がいます。この春、本島前長崎市長は、広島平和研究所の年報に「広島よおごるなかれ」と題する文章を寄稿いたしました。そしてこの夏にも広島に來られて、そういう趣旨の講演をされました。広島原爆ドームの遺産登録をすべきではなかつたと、こういう主張

でありました。前長崎市長の発言ということから大変大きな話題となったので、わたくしもあまり愉快ではありませんが、この問題に触れないわけにはまいりません。

この、本島さんの文章の要点をかいつまんで言いますと、こういうこととあります。「広島は日本の軍事基地だった。それは当然である。アメリカはパールハーバー空襲の報復として、原爆を落とす。世界は広島に原爆投下を喜んだ。広島には加害の視点がない。世界遺産の登録申請をすべきではなかった。広島はアジアに謝罪し、真珠湾に謝罪し、原爆投下を許さなければならぬ。」いささかその論旨に乱れがありますが、また矛盾もあるのですが、この文章を読んだ時、わたくしは大変驚きました。共に、ついこの間まで核兵器の非人道性を糾弾し、そして核兵器廃絶に努力してきた人の発言であるために、大変残念な思いがしたのです。

非人道的で残虐な兵器だから使ってはならない、こういつてきているわけでありました。広島が悪い事をしたから、あるいは軍事基地だったから、軍国主義の拠点だったから原爆を落として良い、そういうことにはならないわけでありました。

つまり、その非人道的で残虐な兵器というのはどういうことかと申しますと、平和が回復した後も長い間放射線によって、苦しんでいる被爆者がいるということとあります。わたしたちは、核兵器を使ってはならないということを主張しているのですが、この広島が軍事基地だったから、あるいは軍国主義を倒すために原爆を使ったという論理を否定しなければなりません。もしそういう論理を認めるとしますと、核保有国は自分の国の尺度で他の国を断罪し、そして核兵器を使うかもしれないからであります。わたしたちはいかなる場合にも、いかなる理由でも使ってはならないと主張しております。

外は遺産登録に賛成したのであります。米・中のこの反対を、本島さんは大変重くみただけであります。わたくしは米・中の今、核をめぐる世界には危機が幾つかあります。一つは、核の拡散の問題であります。そして、合わせて核兵器の使用と核戦争の危機というのが、依然として存在しているということ、それは先程申しましたC T B Tが発効しない、あるいはC T B Tがありながらアメリカが臨界前の実験を続けているということに對して、例えば核保有国のインドが大変不信任を持っている。こういうことが続けば、更に核を持つ国が増える可能性が有ります。これは人類にとって、大変大きな問題であります。これを是非とも防がなければならぬこと、もう一つは、核兵器、核物質の管理が不十分なことです。米ソ冷戦時代、両方の管理体制がしっかりしていた時代には核兵器が厳重に管理されていましたが、ロシアになりましてたがが緩んだのでしようか、核兵器とか核物質の流出がいろんな形で伝えられております。

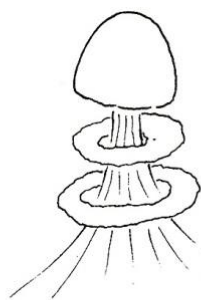
核をめぐる世界の危機

この反対よりも、こうした残りの国が賛成をした、多くの国が賛成をしたというこの事実を重くみております。

先日、レベジというロシア国民共和国党首が広島にやってまいりました。この方は、恐らくエリツイン大統領の次を狙う大統領選挙に立候補する予定の人で、このあいだまでエリツイン大統領の補佐官をし、そして国家安全保障会議の書記をしていました。そのレベジさんがこういうことを言ったのです。ロシア軍所有のスーツケース型の携帯爆弾が存在している。(その数は報道によってまちまちなのですが、百三十何個という数字もあります。) そのうち、百個近くの所在が不明である。自分はその所在確認に、努力をしています。国家安全保障会議の書記の時にいろいろな記録に当たり、科学者に尋ねて所在を確認したのだけれども、四ヵ月後に自分は解任されたので、行方を全部確認することができなかった。自分は携帯型核爆弾が、テロリストの手に入ることを大変心配している、こういうことを言われたのです。わたくしはそれを

聞いて、非常に恐ろしい思いがしたわけでありました。わたしたちは核兵器と言くと、やはり国が大きな弾頭をつかってやっていると思いがちですが、今や、トランクの中に入っている核兵器が存在しているということ、ロシアの高官が言った。まさしくそういうものが存在するのは間違いないと思います。これは、大変なこととあります。こうした核の拡散というものが、わたしたちの世界を覆っている危機の一つであります。

もう一つは、核兵器の工場、あるいは核貯蔵庫の事故というもの、これには原発の事故もはいるかも知りません。それによって地球の環境が汚染されており、人類に影響がある。さらには、さまざまな核廃棄物が累積しています。こういったことが、わたしたちの地球を覆っている危機であります。



非核地帯の実現を

こうした核時代の危険を、本
当にリアリティをもって思い描
いていくには、広島・長崎の被
害の実態を知ることから始めな
ければなりません。また、その
事実を世界に伝える絶え間ない
努力というものが、わたしたち
に求められているのでありま
す。わたしたちが核兵器廃絶を
訴えます。その時に、アジアの
人々、あるいはアメリカの人
たちから言われます。日本は核
の傘にいないではないか、あなた
方が核の廃絶を言うのは矛盾し
ていると、絶えず反論されるわ
けです。核抑止論を否定するわ
たしたちは、核がなくても国家
の、あるいは国民の安全が得ら
れる国際関係をつくり出してい
かなければならないと、思っ
ております。

今年七月に、国際シンポジウ
ムに出席のため広島に来た、デ
クラーク前南アフリカ共和国大
統領が、こういう話をされました。
核を持たないことが、より
国家の安全を保障すると考え
て、自分の在任中に保有してい
た核兵器を廃棄したということ
を言われたのです。つまり、核
を持つていても国家の安全を守

れないということ、前南アフ
リカ共和国大統領が言った。こ
れは冷戦が終わり、各国間の相
互依存という関係が進む中で、
核抑止力に頼る国家安全保障の
考え方が、現実的でない、既に
時代後れになったことを示して
いると、わたくしは思います。
ただ、こういう考え方に全く賛
成しないのが、アメリカの政治
家たちでありまして、核兵器が
なければ国際秩序を保てない、
国家の安全を保てないというこ
とを盛んに主張します。

わたくしは、この夏の平和宣
言で日本政府に対しまして、核
の傘に頼らない安全保障のあり
方を探るべきだということをお
めました。日本の安全保障
が、核によって本当に守られる
かどうか。わたくしは、日本が
もつと別の外交努力をすべきで
はないかと思えます。日本は絶
えず唯一の被爆国ということ
を政府も言っております。国連で
もそういうことを演説してあり
ます。そうした被爆国、日本の
外交努力の目標というものは、
やはり核兵器のない世界をつ
くるといふことにあると思いま
す。このためにはどうすればい

いのか。やはり、この東アジ
ア、東北アジアに核のない地帯
をつくっていく。先程少し触れ
ましたけれども、南アフリカだ
とか南太平洋、オーストラリ
ア、あの辺りはすべて非核地帯
条約ができております。そうい
うものをつくることを目指し
て、努力をしていくべきだろ
うと思えます。その場合に、さ
ざまな障害があるうと思いま
す。例えば、日本が核の傘に入
っているということ、そのこと
が例えば中国を大変刺激して
いるのかもしれない。とするなら
ば、日本は隣国の韓国とか、
あるいは中国とか、あるいは
フィリピン、インドネシア、ベ
トナム、そういった国々、アメ
リカ、ロシア、そうした国々と
すべて安全保障の体制をつく
っていく努力をしなければなら
ない。それができれば、核の傘に
頼らなくても国家の安全は保
てるのではないか。そうした外交
努力をやるべきだということ
が、わたくしが平和宣言で言っ
たことであります。

こうしたことを非現実的だ
と思うか、あるいは空想的、理想
的夢物語にすぎないと思うか。
いや、そうではなくて、今世界
が核のない世界を求めている。
さまざまな国が国際社会にお

て努力している。そういう時に
日本政府が、ただ何の努力もし
ないで日米安保条約があるから
というだけでそこに安住をして
いる。つまり、日本の本當の意
味での真の安全、国民の安全と
いうものをどうやって実現する
かという外交努力が、国民の目
に見えてこないということに
対して、わたくしは大変な苛立ち
を覚えているのであります。

これからの課題ドーム

こうした課題をわたしたちは
世界に訴えていくと同時に、こ
れからは日本政府の政策とし
て、核のない世界をつくる先頭
であつてほしいということ、
強く強く言っていきたいと思
います。そして同時に、わたした
ちが今直面している課題とい
うのは、如何にして被爆の体験を
次の世代に、あるいは海外へ、
世界へ伝えていくかということ
であります。わたしたちは、さ
まざまな原爆展を開催すると
か、記録を収集する、証言ビデ
オを作成するとか、いろいろな
ことをやっておりますが、要す
るにこうした被爆体験を伝えて
いく技術、あるいは表現の技術
といったことを、もつともつと
磨いていく必要があると思いま

す。つまり、なまの話を伝えて
いく人がだんだん少なくなつて
いくとするならば、これはどう
やって伝えていくかということ
を一生懸命考えなければなら
ない。そういう意味で、原爆ド
ームというのは核のない世界を
つくるための日本の外交努力、
あるいはこうした被爆体験を伝
達していくわたしたちの努力、
こういうものを後ろから支えて
くれる存在だということに思
います。また、その原爆ドームは
わたしたちを叱咤激励する存在
であるというようにも思っ
ております。

一番最初に、原爆ドームの遺
産登録を「喜ぶべき」という
ような表現ではなくて、「意義
深い」ことだと言いましたが、
何故そう言ったかと申します
と、そうした原爆ドームの背後
と言いましようか、原爆ドーム
というもののその後ろに、あれ
だけ多くの犠牲者がいるとい
うことを思うからであります。そ
ういう意味で、原爆ドームの世
界遺産登録というものは、絶え
ずわたしたちを励まし、そして
叱咤激励する、そうした存在で
あるというように思いました。
丁度時間になりましたので、わ
たくしの話を終わらせて頂きま
す。(了)